The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フリーア美術館所蔵「聖徳太子・二童子像」について
Author(s)	都築, 茉莉
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 5, p. 39-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87128
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フリーア美術館所蔵「聖徳太子・二童子像」について

日本東洋美術史　博士前期課程二年
都築　茉莉

はじめに

聖徳太子（五七四～六二二）は、日本の歴史上、最も多くの、また多様な肖像が制作されてきた人物である。数ある太子像の中でも、髪を角髪に結い、袍と袈裟を着け、手には柄香炉を持つ童子形の太子像が多く現存している。

そうした童子形の太子像のなかでも本発表では、米・フリーア美術館所蔵「聖徳太子・二童子像」（以下、本図）に注目する。本図は、太子を中心に、両脇に経巻と天蓋を持つ二童子を配する三尊形式をとる。先行研究では、太子が自身の廟崛へ向かう姿（「廟崛太子」）を描いたものとされてきたが、本図はそのなかでも最も古様な作風を示す作例ながら、これまで詳細に論じられることはなかった。よって本発表では、本図の図様の意味や制作年代、成立背景について検討する。

一、本図の概要と先行研究

本図は、縦一一〇・三cm、横七三・〇cm、絹本著色の掛幅で、画面に大きく太子と二童子を描き、画面上部両端の色紙形には画讃がある。三者はともに左を向き、足先を開いて立つ。太子は両手で柄香炉、二童子はそれぞれ縦長の経巻容器と天蓋を持つ。髪は左右で結び、腰辺りまで長く垂下させる垂髪である。いずれも袍、袴を着けるが、太子はさらに袈裟と横被を着け、袍の裾を後ろに長く引くのが特徴的である。

画賛は、聖徳太子に仮託しながら、実際には寛弘四年（一〇〇七）頃に大阪・四天王寺で制作されたとされる『四天王寺御手印縁起』（以下、『御手印縁起』）の一節を引いている。また、本図の箱書きに四天王寺の有力な衆徒の一つである秋野坊の第四十一世・由淳（？～一七〇八）の名が認められることから、江戸時代前期には四天王寺に伝来したことが判明する。以上、画讃と伝来から本図は四天王寺における制作が想定される。

本図の主な先行研究として、小山正文氏[1]、津田徹英氏[2]の論考が挙げられる。小山氏は、本図とほぼ同図様の作例に「廟崛偈」（太子が自らの廟崛に注記したという伝承をもつ偈文）が引かれ、かつ童子が燭台をもつことから、本図様を「廟崛太子」と呼ぶべきものとした。津田氏は小山氏の論を受け、本図を「廟崛太子」と認めつつ、画讃の内容から太子が前生、中国・衡山の慧思禅師（天台宗の開祖・智顗の師）であった折に所

---

[1] 小山正文「三尊形式の聖徳太子像」『同朋仏教』第二八号、同朋大学仏教学会、一九九三年
[2] 津田徹英「中世における聖徳太子図像の受容とその意義」『密教図像』第一六号、密教図像学会、一九九七年

持していた八巻一軸の法華経を感得するという「衡山取経」説話の投影があると述べた。

このように先行研究では、いずれも本図を「廟崛太子」とするが、本図は同図様の作例の中で最も古様な作風を示し、かつ讃や童子の持物に違いが認められるため、はたして「廟崛太子」と呼ぶべきか否か再検討を要するように思われる。

二、図様の検討

本図の特徴的な図様である㈠縦長の経巻容器、㈡長い袍の裾、㈢長い垂髪に注目し、その図様の意味について検討を行う。

㈠縦長の経巻容器

経巻容器については、これまで先行研究による指摘はない。そこで、縦に経巻を納める形態に注目し、実作例や絵画に描かれた経巻容器から検討を行う。

実作例として経筒と厨子が挙げられる。経筒は、十世紀後半の埋経の隆盛とともに多数制作され、その多くに法華経が納められていた。また厨子には、経巻を仏像のように荘厳するための設えであるという指摘がある[3]。

一方、絵画作例にも経巻を本尊として奉安する場面が描かれる。知恩院所蔵『法然上人絵伝』巻九第一段の文治四年（一一八八）の後白河法皇の如法経会（厳格な作法に従って『法華経』を書写供養する法要）の場面に、厨子に経筒を納め、その中に本尊である法華経の料紙を奉安する様子が描かれる。このように、経巻を縦に安置する形態には、経巻を礼拝対象とみる意味合いがあると考えられ、とりわけ法華経との関連が窺える。

さらに、本図以前に成立した太子像には、複数の経巻を納める経箱が描かれた例があるが、本図では一巻を納める容器に変更されており、むしろ一巻本を強調していると考えられる。太子所縁の一巻本の経典には「細字法華経」と『勝鬘経義疏』があるが、この形態と法華経の関連から、本図に描かれる経巻が「細字法華経」である蓋然性が高いことを指摘する。

㈡長い袍の裾

次に太子の裾の長い袍については、先行研究[4]によって絵巻や仏画等に表される童子の姿と共通することが指摘されている。特に注目されるのが、『法然上人絵伝』巻九第四段の文治四年の如法経十種供養（十種の供物等で経巻や仏像を供養する儀礼）の場面に描かれる「天童」である。「天童」は、文治四年の法会や建保二年（一二一四）の後鳥羽上皇の十種供養にも参列しており、そこには天台座主・慈円（一一五五～一二二五）が関わったことがわかる（『門葉記』如法経四）。また、俊乗房重源は迎講（阿弥陀如来と諸仏が極楽より来迎するさまを演ずる法会）のため「天童装束卅具」を施入しているが[5]、阿弥陀来迎図には、聖衆を先導する持幡童子が「天童」と共通する姿で描かれている。

---

3 奈良国立博物館『奈良博三昧』作品解説、二〇二一年

4 土谷恵「舞童・天童と持幡童-描かれた中世寺院の童たち」『中世寺院の社会と芸能』吉川弘文館、二〇〇一年

5 小林剛編『俊乗房重源史料集成（奈良国立文化財研究所史料第四冊）』吉川弘文館、一九六五年、三六六頁

このように「天童」は鎌倉時代初頭の法会に登場し、また慈円・重源が関与していることが注目されるが、その服制を太子像に反映することで聖なるイメージを付与したのではあるまいか。

㈢長い垂髪

垂髪は裾を長く引く装束の童子にもしばしばみられるが、大東急記念文庫所蔵『金剛波羅蜜経』見返し絵の春日若宮影向図や石清水八幡宮所蔵の童子形神像など童子形の神像にもみられることが注目される。藤岡穣氏は、聖徳太子摂政像の表情や服制に神像と共通する表現が認められ、神像をイメージソースとし太子が神格化され、鎌倉時代以降、童子形太子にも受け継がれたことを指摘している[6]。そうした太子像と神像の関係を踏まえると、垂髪もまた神像から取り入れられた太子の神性の表現と考えられる。

以上のように本図の太子図様は、「天童」や神像から図様を取り入れた神聖な姿を表したものと理解することができる。また、画讃の『御手印縁起』の引用が、衡山における法華経取経という太子の聖性をしめす説話であるのも、そうした図様に相応しいと考えられる。すなわち本図は、四天王寺で新たに考案された太子の聖性、神性を強調した、いわば真容ともいうべき作品であると考えられる。

三、本図の制作年代

本図の制作年代について先行研究では、鎌倉時代前期または末期と見解が分かれている。そこで太子の相貌について、奈良・法隆寺伝来の承久四年(一二二二)の作とみられる「聖徳太子勝鬘経講讃図」(承久本)と文暦二年(一二三五)作の「聖徳太子勝鬘経講讃図」(文暦本)、また暦仁元年(一二三八)頃の制作と考えられている「五尊像」の三作品と比較を行ったところ、本図の面長で、頭頂部が平らになり、後頭部が突き出るような頭の形は、文暦本や「五尊像」とよく近似している。一方で、承久本の丸みのある頭の曲線や輪郭線は、十一世紀の作とされる兵庫・一乗寺所蔵の天台高僧像のうち「聖徳太子像」にみられることから、承久本は前時代の様式を継承するものと考えられ、本図は承久本よりも文暦本や「五尊像」に趣が近いと思われる。また、「五尊像」は太子の髪が長い垂髪で表される早期の作例であることも勘案すると、本図の制作年代については鎌倉時代前期、一二三〇年代～四〇年代頃に位置付けるのが妥当であろう。

四、図様の成立背景

これまでの検討をもとに、本図様の成立に四天王寺別当を務めた天台座主・慈円が関与した可能性を提起する。慈円は父が関白藤原忠通、兄には九条兼実がいる。建久三年(一一九二)以降しばしば天台座主に補任され、後鳥羽上皇の護持僧となり、朝廷・公

---

[6]藤岡穣「聖徳太子の成立―行像と生身、そして迎接像への射程―」『東アジア仏像史論』、中央公論美術出版、二〇二一年

家の祈祷によって仏法興隆に挺身した。四天王寺別当は、承元元年（一二〇七）と建保元年（一二一三）～嘉禄元年（一二二五）の計十三年間務めあげた。慈円に注目する理由として、彼が前述の如法経十種供養に参列し、四天王寺においても同供養を挙行した記録が残っていること、また、別当期に同寺の宝蔵より「細字法華経」の発見がされたことが挙げられ、図様との関連が認められるからである。直接的な関係を示す史料は見いだせていないが、以上の理由から、本図様の成立に慈円が関与した可能性が考えられる。だとすれば、慈円没後の作とみられる本図は、原本の写しとみるべきものかも知れない。

また最後に、四天王寺で成立した本図様が、廟崛と直接結びつくようになる背景として、太子信仰の中心寺院で四天王寺と対抗関係にあった法隆寺の廟崛信仰が影響した可能性について提示する。法隆寺の学僧・顕真筆『聖徳太子伝私記』（以下、『私記』）では、顕真の祖先・調子丸（太子の舎人）が上宮王家の葬送・改葬に関与したなど、これ以前の太子伝にはなかった調子丸の記事を掲載している。そうすることで顕真は、自身の血脈や法隆寺の正統性を主張したとみられている。また、顕真の発願で制作された「聖皇曼荼羅」（建長六年〈一二五四〉）には、太子廟に合葬される太子、母・間人皇后、妃・膳妃を阿弥陀三尊に見立てた信仰に基づく人物配置や、廟崛に関するモチーフがみられる。上記の三名を阿弥陀三尊とする信仰は、「廟崛偈」、「上宮太子廟参拝記文」に記されており、それらを引用する現存最古の史料が『私記』である[7]。

このように顕真が廟崛信仰を主張する背景には、慈円を中心とした四天王寺における廟崛への関心の高まりがあったと考えられる。慈円は、建久二年（一一九一）と翌三年に太子廟を訪れており、参詣前には、四天王寺において法華経の書写と供養を行ったことが記録に残っている[8]。これを契機とし、人々の太子廟への参詣が盛んとなった。このような四天王寺の動きに対抗すべく、法隆寺では廟崛信仰が強調されるようになり、その影響を受け、本図様は廟崛と直接結びつけられるようになったと考えられる。

おわりに

本図は讃や伝来から四天王寺で制作されたものと想定される。図様は、右童子の持つ経巻は太子所縁の「細字法華経」であり、太子の服制には聖なる童子「天童」や神像の要素を取り入れ、新たに真容として考案された太子像であったと考えられる。

また、太子の相貌から鎌倉時代前期（一二三〇～四〇年代）の制作とみられ、それ以前に成立した図様を継承するものとみられること、そして本図様の成立に慈円が関与した可能性を提示した。また、本図様が廟崛と結びつくようになる背景には、慈円を中心とする四天王寺での廟崛信仰への関心の高まりとともに、それに対抗する法隆寺の廟崛信仰の影響があったことを指摘した。

---

[7] 藤井由紀子「中世法隆寺と聖徳太子関連伝承の再生」『日本古代中世の政治と文化』吉川弘文館、一九九七年

[8] 多賀宗隼編著『校本拾玉集』吉川弘文館、一九七一年、五六一頁、一六七頁